

特集 「今、大きく変わりつつある不妊症治療」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科

女性生涯医科学

森 泰 輔



今、不妊症診療は大きく変わりつつある。

少子化対策の1つとして、時の総理大臣の肝煎りでその発言からわずか1年半で不妊治療の保険化が導入されたことはみなさまご存じであろう。2022年4月のことである。この事実は、「不妊症」が疾病として公式に認知されたことにほかならない。一方で、国民が供出した医療費から支払われるという、いわゆる曖昧さや無駄が許されなくなったことは、われわれがこれまで以上に襟を正してこの生殖医療に対峙しなければならないことを改めて認識させられている。

世界初の体外受精児の誕生から40年以上を経た今、生殖補助医療技術そのものも目まぐるしい発展を遂げている。当初、「神の領域に踏み込む」ものと揶揄され、多くの議論があった本技術には2008年にノーベル生理医学賞が与えられ、今や多くの人々に恩恵をもたらしている。現在、受精卵や精子、卵子、卵巣組織の凍結保存技術が確立され、それらの遺伝子解析も可能となっている。がん治療の成績向上も相まって、がんに対する集学的治療後に妊娠成立・生児獲得を目指すといった「がん・生殖医療」は実際に当院でも実施可能である。一方で、不妊に悩むカップルはその経済的負担以外にも、自分に不妊の原因があるのかもしれないといった自責感、家族からのプレッシャー、流早・死産による悲嘆、喪失感、不安など、社会的・心理的ストレスを抱えており、これらに対する包括的支援は喫緊の課題である。

本特集ではまず、東京大学の廣田 泰教授に「不妊症診療～保険適用拡大と課題～」について概説いただく廣田教授は、先述の総理大臣の所

信表明を受け、急遽ルール・体制づくりが必要とのことで「生殖医療ガイドライン」作成を主導的に担当された本邦のトップランナーである。東京大学教授に就任されたばかりの多忙な時期にも関わらず、本執筆に快諾いただいた。この場をお借りして感謝したい。本特集のトップバッターを飾っていただき、大変光栄に存じます。続いて、本学女性生涯医科学の藤井麻耶先生には、「女性に対する不妊症診療～一般検査からARTまで～」と題して、産婦人科学の観点から不妊治療といっても多岐に亘る病態・原因からその診断法、治療に至るまで解説いただいた。また、本学泌尿器外科の鳴川 司先生には、「男性不妊症の治療戦略」として泌尿器科学の観点からその原因と治療について概説いただいた。不妊症は女性だけの問題と見做されがちであるが決してそうではなく、男性側が原因であることも多い。その治療戦略も多くの選択肢があることについてもお知りおきいただきたい。さらには、本学精神機能病態学の中前 貴先生から「不妊に悩む患者へのメンタルヘルス支援」と題して、男女を問わず、メンタルヘルスやカウンセリングの重要性さらには施策、社会的支援について解説いただいた。最後に、本学女性生涯医科学の沖村浩之先生には、「がん生殖医療センターとしての当科の取り組み」として、とくに小児・AYA世代のがん患者さんの妊孕性温存療法の実際と課題について紹介いただいた。

本特集を振り返ってみると、不妊症診療は多くの診療科連携、医師・コメディカルとの協力的体制の中で行われていることに改めて気づかされる。患者さんと児の幸福、健全な生殖医療の

発展を目指して、これからも質の高い診療および支援の提供を心がけていきたい。本特集が読者のみなさんに臨床医学・社会医学の接点とい

う視点から神秘なる生殖現象を捉えていただく良い機会となれば幸いです。